

◆第4回講演会要旨◆

「京焼の歴史について」

日時：昭和61年7月5日(土)午後2時～4時

会場：中之島中央公会堂

講師：京都国立博物館 学芸課工芸室長 河原正彦氏

京都で生れ育った焼きものということをお話をさせていただきます。まず京都で焼きものが始まったのはいつかという問題、第2にそれがどういう形で展開をしていったかという問題、3番目に、京都の焼きものを現在「京焼」、「清水焼」というような言い方で併称しておりますが、それらがどういう形で生れ育っていったのか。大きく3つの部分に焦点を合せてお話をしようと思います。

最初の京都の焼きものがいつ生れたかということに関しては、だんだんとそのスタートの時点が古くなってきています。昔は寛永(1624～1643)の初め頃に、三文字屋九右衛門という人が三条の粟田口へやって来て始めのものがスタートだと言われておりました。次に博多の豪商で、お茶人の神谷宗湛の茶会記「神谷宗湛日記」の中に、京焼という言葉が初めて出てまいります。これが慶長10年(1605)。更にまた近年、有田関係の記録を調べていますと、鍋島藩の藩主・鍋島勝茂が人取に在任の折、国許へ出した手紙がみつかりました。その中に、三条台候使者が肥前へ廻り下って、そこで焼きものを作って持ち帰ってくる。つまり京都の三条の焼きものの職人が、唐津系の技法を中心とするものだと考えられますが、とにかく肥前へ行って焼きものを作り、それを京へ持ち帰って販売している。それを人取に在任の勝茂が美見し、「大変けれどなかなかので国許ではそれをやめさせなければならぬ」といった内容の手紙が出てまいりました。この手紙には何年何月という明確な年号が無いわけですが、その中に黒田如水、或いは古田織部といった人の名前が出てまいります。黒田如水が亡くなりませうが慶長9年(1604)でございますので、それより遡る時期は、三条で京焼が行われていたということになります。台焼とは、現代作りの焼きものとも違う意味かと思いますが、三条でとにかく焼きものを作っている人たちの存在が明確になってまいります。勿論それ以前の京都にも様々な生活の器としての焼きものがあつたわけですが、いわゆる高火度焼成による本格的な焼きものは、慶長の初めぐらいから始まっているのではないかと思われます。ですから今日お話を京焼は、だいたい慶長(1598～1614)の初めぐらいから、以降のものだとお考えいただければ良いかと思えます。

ひとつお断りしておかなくてはならないのは、京焼と呼ばれるものの他に、いわゆる楽茶碗がありますが、楽茶碗に関しては色々な見解があります。確かに一番大きな転機で京都の焼きものを捉えた際には、京焼の川に入れて詠られることもあります。しかしこれはひとつの家職としての性格がたいへん強いので、狭義、つまり少し絞った形で京焼を論ずる時には、一応外しておいた方が何かと便利だと思えます。

村歌京都に、桃山時代の終りにこういって焼きものが起こるのかということについては、この時代の色々な文獻・茶会記・日記等を読んでいざますと、記録の上に出てまいります。これは、当時盛んになってまいりました茶の湯の興隆・流行と関係があります。この時代は、茶方の方でもまだ

千家を中心とするような家元制が確立している時期ではございません。様々な茶人が、様々な自分の試みの中で茶を行っているという時代ですから、そういう意味で自分の好みの作品を作ってみたい、手に入れてみたい、そういった焼きものをかなり距離的にも近い所で供給してくれる場というものを用意しようという動き。それと結び付いて京都の二条東山、今の都ホテルから粟田口神社にかけての地域や、更に青蓮院門跡の地域に及び、そこに瀬戸風の窯業が築かれて焼きものが始められたんだという風に考えてまいります。

特にこの初期の焼きものに関しては、先程言いました「神谷宗湛日記」の中に茶碗、或いは茶人という形で出てまいります。その後、慶長・元和・寛永期に入りますと金剛寺の住職で鳳林承章和尚という方が残された日記「隔堂記」がありますが、その中に、京焼の初期の動きのわかる部分が出てまいります。最も多いのは茶入で、それも唐物写しの茶入とか、瀬戸茶入の写しといったものが盛んに出てくる。茶碗では高麗茶碗ですが、高麗茶碗も極く大きくて作物と寂物というグループに分れます。作物というのは元龜・天正の頃に盛んに使われた井戸茶碗、或いは三島・熊川、とよやといった、一手古い時代のもの。京焼で作られるのは主としてそういうものではなく、その後盛んに用いられた寂物のグループ、即ち御本や伊羅保・具器といったものです。それらが盛んに京都で作られ、流布していたことがこの記録の中から見られるわけです。従って、京都で最初に作られたのは茶道具類で、茶入や茶碗等ということになり、茶碗も高麗もの寂物が盛んに作られていたということがわかってまいります。

しかし、記録の上ではそういう形で押さえられる訳ですが、作られた現物というのは大変難しくございませう。それらは写し物であります、本歌に迫る作品を作っています。京焼の瀬戸写し、唐物写し、或いは御本写しの茶碗とかいうことは、現物の方から押さえることはなかなか難しいことです。つまり、そういった本歌に写しているものが随分あるのではないかとこの頃には思っています。例えば、南禅寺に金地院というお寺がありますが、ここにある井戸茶碗、井戸型の茶碗等は、或いは京焼で作られたものかという風に我々は考えます。

そういう形で始まった京焼が、実は大きく展開をするのはやはり粟田口、或いは八坂と呼ばれる焼きものの生産地でした。瀬戸釉・鉄釉を掛けただけで、銚子で模様が描かれたもの、或いは線釉、紫釉といった低火度釉のもの、これを交趾焼と呼んでいますが、そういうものが作られていることもその記録の中でわかります。しかし、そういう京焼の様々な新しい動き、そういうものを一種の集大成した形で出てくるのが、仁清ということになるかと思えます。仁清は、仁和寺の「仁」と清右衛門の「清」の字をとって意歌印章にしています。このことは、彼の弟子・尾形乾山が与えた陶法秘伝書の中に書かれています。

京都の焼きものに関する状況は、ひとつはやはり楽焼・仁清・乾山とい

う伝世の作品群があります。それからもうひとつは、他の窯場にはない、これはひとつの研究上の利点にもなるわけですが、色々な記録類があります。「隔堂記」、神谷宗湛の「宗湛日記」等の茶会記の類、或いは乾山が残した陶法伝書「陶工必用」というものと「陶磁製法」の2冊があります。また、幕末の文政13年(1830)に書かれた、欽古堂庵祐の「陶磁指南」といったような記録があります。これらによってかなり歴史的な展開の諸相



を追い掛けて、それらと伝世している作品とを合せて考えることができませう。しかし、京都の窯が、京都という都市構成の中で生れ育ってきたために、他の窯場では窯跡の発掘によってそれを色々な形で跡付けるという一種の科学的な手法でそれを裏付けることができますが、残念ながら京都では沢山の家が建つておつたりして、窯跡からの発掘調査による跡付けは、大変りにくいという部分も持っておりませう。

そんな形で、まず東山で起こった焼きものが、仁清によって集大成され、乾山に受け継がれ、ひとつの大きな京都の焼きものの特徴として世の中に目立つていっていきます。これらはいずれも、いわゆる陶磁器の中の陶器にあたります。また、この期には磁器の焼成は始まっていないようです。

一方、有田あたりでは慶長の頃から磁器が焼成されはじめたということになっておりますが、鳳林和尚の「隔堂記」などによって寛永の17・18年(1640、1641)頃から盛んに、伊万里磁器が入ってくる様子があります。しかし、まだ京都では、磁器を焼く程の力量を持たず、それは18世紀の後半まで待たねばなりません。これは、乾山の活躍が終焉を迎え、その後、この世界に出てまいります奥田頌川、それからその弟子筋にあたりませう青木木米、高橋道八、或いはその弟の尾形周平、木米の兄弟弟子の欽古堂庵祐、或いはちよつと別系統になりますが、保全・和全、これもちよつと別系統になりますが、頌川よりは一步早く京焼の中に顔を出してまいります清水六兵衛といったような人達が活躍してまいりまして、ここに至って初めて磁器焼成と陶器の焼成というものが併存して京焼を形成してくるという形になるかと思えます。(このあと、スライドを使って、個々の作品を通じて詳細な解説がなされました)

(文責：友の会事務局)

プロフィール

河原正彦氏

1935年生れ。同志社大学大学院卒。
現在、京都国立博物館学芸課工芸室長。
著書は、「古清水」、「京焼」等。



清 鉄絵水仙文茶碗



清川 兵衛赤絵写八角水指